

近森オルソリハビリテーション病院 医療相談室

主任 恒石 千寿代

近森オルソリハビリテーション病院では3階に一般・地域包括ケア病棟、4階に回復期病棟がおかれ2病棟の体制がとられている。ソーシャルワーカーは、3階に1名、4階に2名の配置となっている。

医療相談室では例年同様、入院ケースを中心とした業務を行った。2020年の相談件数は一般・包括1551件、回復期3390件、外来・その他623件(図1)。昨年とほぼ変わりはないが外来・その他相談件数が昨年より80件ほど増加。内容は介護保険に関するものが最も多い。

自宅退院件数は回復期病棟308件、一般・地域包括ケア病棟236件。そのなかで介護保険サービス利用のためソーシャルワーカーがケアマネジャーや地域包括支援センターにつなぎ、共に退院の調整を行ったケースは、回復期病棟112件、一般・地域包括ケア病棟47件で前年とほぼ同様の件数となっている。

本年はコロナの影響で家族面会や地域からの病院への立入りが制限された。そのため、退院前担当者会の開催ができないことが続き前年の28件が2020年は8件、また病院から地域へ出向くことも感染予防のため難しくなり、自宅訪問も前年19件から3件に減少した。さらに地域の連携機関面会も昨年の348件から123件、地域・施設との情報交換の機会が極端に減少した。

このようなコロナ禍に対応するため、ソーシャルワーカーは入院中の患者へ心理的支援を行うとともにこれまで患者をサポートしてきた家族とのつながりを持ち、入院生活の不安を軽減できるようサポート体制を整えていく。

また、地域との連携においてはこれまで顔の見える連携を積極的に進めてきたが、コロナ禍では厳しい現状となっている。それでもソーシャルワーカーは病院と関係機関の窓口である役割に変わりはなく、地域とつながるために更なる工夫を重ねていく必要があると考える。

これからもソーシャルワーカーの質の向上に努めるとともに、その専門性を最大限に生かし、地域連携の軸となりスムーズな在宅への移行ができることを目指す。

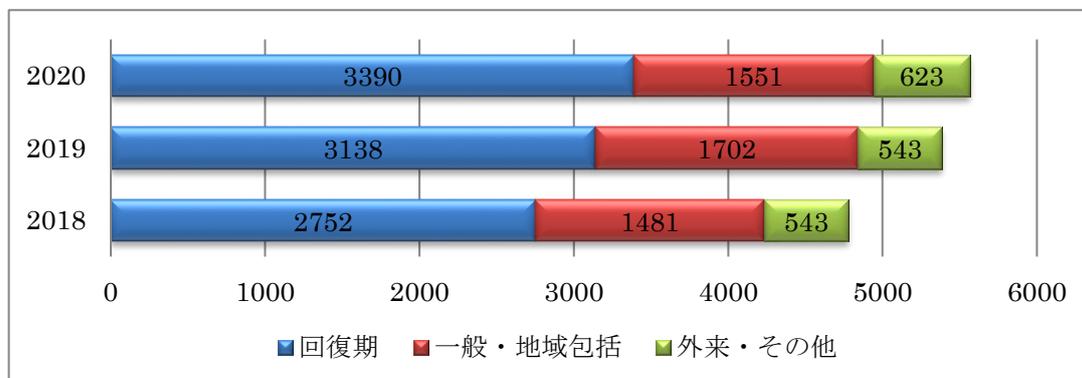


図1 過去3年の相談件数